

## 葬式は、要らない

島田 裕巳 著

幻冬舎新書

777円

## 本棚から一冊

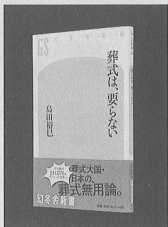
人口の高齢化が進む日本社会では死ぬ人も自然と増えている。葬式や人やお墓の数も増え続けるのは必然の流れだ。一方で、血縁や地縁の希薄化や個人化とこの間も進む。葬式のあり方とは、どのようこの生死に区切りをつけるかという、あらゆる人に等しく当てはまる普遍的な問題であるのだが、多くの人は普段はほとんど考えない。たかが葬式というものが表層だろう。書評などもその例外ではない。いろいろなニュースに触れながら、考える視点を求めて本書を手にとってみた。

現代日本の葬式の慣行がどのような歴史的な経緯で成立し、なぜ

評者 早稲田大学大学院教授



川本 裕子



国際的に見て特異なのか。多額の費用の内訳はどうなっているのか。こうした基本的事実が、客観的なデータ裏に裏付けられない。日本の葬儀費用は平均300万円と世界のどの国と比べても突出して高いという本書

の指摘は驚愕の事実だ。そうだとするとこれまでどのような日本の葬式のあり方はこのまま変化なしでは済ませられない。誰もが基礎知識として押さえておくべき事柄がわかりやすく示されている。ただし、「便利なチェックポイント」的

## 慣行を客観的データで明快に説明

して入るといふ意味である。

また、本書は、題名から想像されるような「葬式不要論」を押し付けた主張してくるタイプの本でも、実はない。もちろん現在の日本の葬式が抱える問題も例えは成金という慣習が仏教国でも日本だけにあつたもので、かつそれに相当お金がかつていることなどは数多く、しかも説得的に指摘してくれるのだが、結論として自分や家族の葬式をどうすべきかについては、各人が判断していくべきだというスタイルで一貫している。

あるべき葬式を論じている。生をどのよう送るべきかという真摯な問いかけと表裏一体であることが改めて浮き彫りになる。広い意味で自分の人生で何が重要か、を究極めることの大切さを問うているように思う。